

学校だより



みなみたなか

平成23年9月30日
練馬区立南田中小学校
校長 榎谷 雅弘

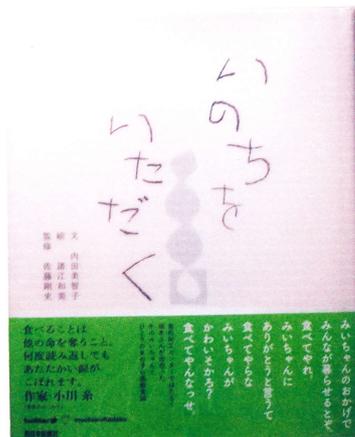
いのちをいただく (生きることは、命をいただくこと)

校長 榎谷 雅弘

知り合いから紹介された内田美智子さんの「いのちをいただく」という本をぜひ、児童に伝えたいと、9月12日の体育館で行った全校朝会で、実物投影機を使いながら読み聞かせをしました。

この本は、「命と食」をテーマに講演を行う熊本県の食肉加工センターに勤務する坂本義喜さんの体験談を基にした絵本です。坂本さんは「牛を殺す」という具体的な事例を交えながら、「動物の命を私たちはいただき、生かされている」ことの意味を問い続けます。その講演録を、福岡県行橋市の助産師、内田美智子さんが物語り風にまとめ、佐賀県三瀬村の画家、諸江和美さんが絵をつけました。

物語は、小学校の授業参観をきっかけに、坂本さんと息子のしのぶ君が食肉加工センターの仕事について語り合う場面から、牛の「みいちゃん」を同センターに運び込んだ女の子の家族と、坂本さんとの出会いへと展開します。



これまで女の子がかわいがってきた牛の「みいちゃん」を、西日本新聞社刊「いのちをいただく」坂本さんが、「みいちゃん、ごめんよう。・・・」と言って殺す場面（最後の瞬間に「みいちゃん」の大きな目から涙がこぼれ落ちてきます。）や女の子が「みいちゃん、いただきます。おいしかあ、おいしかあ」と言って泣きながら食べる場面などは、何度読んでも涙があふれてきます。「食べ物を大事にしなさい」と百回・千回言うよりもこの本を読んだ方がよっぽど子供たちの心に響くのではないかと思います。機会がありましたら、ぜひ、一度、御覧ください。

担任から、「給食をいつもは残す子が一生けん命黙々と食べていました。」とうれしい話もきかせてもらいました。一年生からは、道徳で勉強した「いのちのリレー」と結びつけ、「食べ物の大切さ」や「いのちの大切さ」を考えましたという手紙ももらいました。子供たちにとって、「食べること」や「生きること」を考えるきっかけになればこの上ない幸せです。

内田美智子さんのあとがきの中で、「私達は奪われた命の意味も考えず、毎日肉を食べています。

自分で直接手を汚すこともなく、坂本さんのような方々の悲しみも苦しきも知らず、肉を食べています。『いただきます』も『ごちそうさま』も言わずにご飯を食べることは私たちには許されないことです。感謝しないで食べるなんて許されないことです。食べ残すなんてもってのほかです…」と記されています。私たち大人も常に心に刻みつけたいものです。

食べ物に感謝することにより、子供たちは、毎日の生活をもっと大切に真剣に生きていかなければならないと気付くものと信じています。

ちょうど、この時期に「国連 WFP 協会」より、WFP エッセイコンテストの募集案内がありましたので、

20日の全校朝会で、WFPの活動（飢えに苦しんで、学校に通うことができない、学校へ行っても食事をとることができない、そんな子供たちに学校給食を支給することで食糧と教育支援する「学校給食プログラム」を行っています。）と「食べること」を考えたエッセイに応募すると一作品につき、給食1食分（30円）が、特別協賛企業の協力により国連 WFP 協会に寄付され、学校給食支援に役立てらることを紹介しました。

募集は、4年生以上の児童が対象となっています。10月6日までに参加希望者は、校長まで提出するよう呼びかけています。

保護者の方でも、ご参加いただけます。ご協力いただける方は、是非、ご連絡ください。

WFPエッセイコンテスト2011
「食べる」を考える
 ～あなたのエッセイが達達国一杯の給食に～

世界には、すべての人々が食べるのに十分な食べ物があります。それにもかかわらず、世界中で何億人もの人が毎日の食料不足に悩んでいます。日本でも一部の貧しい日本人の数は大きく、私たちの多くが生活の基盤である「食べる」ことを改めて考えさせられました。本エッセイコンテストのテーマは、「食べる」を考える。「食べる」ことに関するエピソードや、日常のさまざまな出来事等を自由に描いてください。一方で、飢餓で苦しむ人々のことも考えた作品を寄せてください。

応募1作品につき、給食1食分(30円)が、特別協賛企業の協力により国連 WFP 協会に寄付され、学校給食支援に役立てられます。

詳細は、WFP エッセイコンテスト専用ウェブサイトにて、
<http://www.wfp.or.jp/essay/index.html>

締切日:10月15日(土)必着
 ※応募者全員に記念品贈呈



World Food Programme からの募集案内